

〈宮本武蔵もの〉実録の系統分類

三 宅 宏 幸

一 問題の所在

宮本武蔵といえば、諸国を流浪する無敗の二刀流の剣客、吉岡一門との決闘、巖流島の決闘で佐々木小次郎を打ち倒す、『五輪書』を執筆した人物、そういった人物像が人口に膾炙していよう。しかしそのような現代における武蔵の人物像は、主に吉川英治著『宮本武蔵』（朝日新聞、昭10～昭14）によって流布している（吉川『宮本武蔵』に基づいた井上雄彦著『バガボンド』（講談社、平11）も現代の我々に大きな影響を与えていよう）。そして、吉川『宮本武蔵』が橋正脩著・豊田景英校訂『二天記』などに基づいており、いわゆる「史実」の武蔵を描いていないということは、これまでも度々述べられている⁽¹⁾。

はじめに断っておきたいことは、本稿は残念ながら歴史的に正しい武蔵像を提示するものではない。あくまで、近世に「実録体小説」として流布した〈虚構〉の武蔵「譚」を扱う。標題を〈宮本武蔵もの〉とする所以である。

近世における〈武蔵もの〉実録については、『日本古典文学大辞典⁽²⁾』「宮本武蔵物」の項（中村幸彦氏執筆）の概要が指針となる。少々長くなるが、以下に引用したい。

実録。熊本藩の「宮本武蔵が、実父吉岡太郎左衛門を武芸の怨みで闇討ちした、後に小倉藩の佐々木巖流を、敵として後の巖流島で討つ筋の実録体小説。写本で伝わった。【展開】初めは元文（一七三六―一七四一）以前に、『巖

流島敵討』『敵討眼流島』などと称する一冊物が出来、これはそのまま『宮本敵討記』などと変化して、明治に至る。この種の敵討の本筋を専らとするものに對し、『武者修行』として巖流を追う途中、白倉源五左衛門・天狗山伏・笠原新三郎らと手合をする武勇伝の加わったものが享和以前に出現し、享和三年（一八〇三）序刊の『絵本二島英雄記』（一名「宮本武勇伝」）十卷十冊として読本化される。幕末に至っては、『宮本佐々木英雄美談』（前後編四十巻など）にまで成長する。武勇伝の中へ、諸岡一羽・兼房又三郎・伊藤一刀斎・塚原卜伝などとの出会いと彼らの略伝を、『本朝武芸小伝』（享和元年（享保の誤りか―論者補）刊）から得て加えたものである。『増補英雄美談』と称するものもある。（傍線論者、以下同）

傍線部Ⅰでは、武蔵が実父である吉岡太郎左衛門を殺害した佐々木巖流を仇として討ち果たすという筋を紹介する。菊池庸介氏「主要実録書名一覽稿」⁽³⁾「宮本武蔵」の項でも同様に、「実録では武蔵を吉岡兼房の子とし、佐々木巖流を親の敵とした仇討話として流布していた」としている。また傍線部Ⅱに関しては、菊池庸介氏「実録と絵本読本——速水春暁齋画作「実録種」絵本読本をめぐって」⁽⁴⁾が、平賀梅雪著・速水春暁齋画の絵本読本『絵本二島英雄記』（享和三年序刊）の種本として『双島志俗豪傑』という（武蔵もの）実録が利用されていることを指摘している。ただし、『双島志俗豪傑』には「白倉源五左衛門・天狗山伏・笠原新三郎」は登場せず、梅雪のオリジナルか、あるいは他の書物に依拠した可能性もある。『絵本二島英雄記』は武蔵の表記を「無三四」とし、出版取締の関係で登場する大名の姓を改変したりもするが（加藤を佐藤、木下を此下など）、大坂角丸芝居『敵討巖流島』（文化五年「一八〇八」初演）が本作を利用するなど演劇にも影響を与えており、吉岡を実父とする設定が流布した要因にもなったと思われる⁽⁵⁾。

しかし一方で、近世には前述の設定とは異なる武蔵を描いた実録も存在する。例えば、山本卓氏「解題」⁽⁶⁾が京都大学附属図書館所蔵の大惣旧蔵の写本読本『双刀英勇談』（文政十一年「一八二八」写）について、岸边にある柳の動きから奥義を得て「岸柳」と改名する「岸柳改名」の逸話や「にせ岸柳」の設定などの特徴から、特に『兵法修練談』という（武蔵もの）実録を利用したことを指摘している。問題は、これらの特徴は先にあげた吉岡を武蔵の実父とする設定

の実録には見えない。すなわち、近世の〈武蔵もの〉実録には内容の異なる系統があることを示唆する。

近時、大熊達也氏「宮本武蔵作品の受容と再生——近世から明治にかけて」⁷⁾が、明治期における武蔵の講談に関する研究を行っている。近世から明治にかけての武蔵関連作品を調査し、明治講談の特徴を整理することを目的としたものであるが、問題として、標題に「近世」とはあるものの、扱ったのは『敵討巖流島』(元文二年「二七三七」初演)、『花樺巖流島』(元文四年初演)、『敵討巖流島』(寛保二年「二七四二」初演)、『花筏巖流島』(延享三年「二七四六」初演)の演劇四作品であり、実録や読本『絵本二島英勇記』には触れていない。例えば『敵討巖流島』の内容は、佐々木巖流が誤って信田左衛門を討ち、巖流を仇として狙う姉妹に月本武者之助が助太刀、姉妹は本懐を遂げるというもので、登場人物の名前は武蔵ではなく「月本武者之助」である。さらに、大熊氏論考に「一方、明治期の作品内では、大半が「吉岡」が実家で、「宮本」が養家である独自の家族構成が作り上げられている」という記述もあるが、この設定は近世の頃から既に見えるもので読本として刊行もされており、明治期の「独自の家族構成」というわけではない。まず近世の〈武蔵もの〉実録の内容を整理した上で、明治期の作品への影響を検証する必要がある。

本稿では、〈武蔵もの〉実録を対象として、その特徴や内容を整理して系統の分類を行う。内容を整理することで、先に述べたように、〈武蔵もの〉実録が近世後期や幕末、明治期にどのように受け継がれたかといった課題へとつながると思われる。なお、〈武蔵もの〉実録の調査にあたっては、前掲菊池氏「主要実録書名一覧稿」に多くを拠ったことを付記しておく。菊池氏は、同内容でも書名が「さまざま」で「不安定」な実録を網羅的に調査した上で、事件ごとに実録の書名を整理された。本稿は菊池氏の研究の上に成り立っている。

二 〈宮本武蔵もの〉実録の系統と特徴

さて、前章で述べたように、近世の〈武蔵もの〉実録には異なる内容が数種ある。そこで、菊池氏「主要実録書名一

「覧稿」に基づき、論者がこれまでに披閲しえた写本の一覧を次頁の表に整理した（表1）。遺漏も多々あり未見の諸本も多く残るが、この表を見ても、数種の書名を冠した（武蔵もの）実録の現存が確認できる。

「がんにゅう」の表記が「岸柳」「巖流」「眼流」「岩流」など諸本によつて揺れがあるが、近世は音に漢字を当てることが多いため、さしあたって問題にしない。B系統における武蔵の幼名などは、友次郎、官二郎、貫次郎という具合である（貫と官は音、官と友は草書体が類似）。ともあれ、（武蔵もの）実録には様々な書名と種類とがあることが確認できよう。そして表1のA・B・Cとは、内容をふまえた上での論者による私の分類である。（武蔵もの）実録は現段階で少なくとも、大きくは三系統、また細かく見ると六系統に分類することができる。以下に書名例を示す。

A1系統『兵法修練談』（寛政七年写、熱田文庫（菊田家）蔵）

2系統『武道小倉袴』（弘化二年写、菊池庸介氏蔵）*『兵法修練談』の筋にディテールを増補

3系統『袖錦岸柳島』（寛政九年写、関西大学中村文庫蔵）

B1系統『宮本武蔵敵討』（寛政二年写、鳥取県立図書館蔵）

2系統『双島志俗豪傑』（天明元年写、萩市立図書館蔵）*『宮本武蔵敵討』の筋に趣向やディテールが増補

C1系統『宮本佐々木英雄美談』（書写年不明、関西大学中村文庫蔵）

A系統がA1からA3の三つ、B系統も二つに分かれる。そしてCが一系統である。ただし、これはどの系統にも当てはまることではあるが、今後の諸本調査によつて新たに系統が増える可能性は十分にある。なお、表1でBのみにしている諸本は、B系統の実録に依拠して成立した読本『絵本二島英勇記』を写した「刊写本」や、あるいは読本に基づいたと判断できる写本を割り当てている。このことは三章でも触れる。

表1 〈武蔵もの〉実録 諸本一覧

	書名	系	年記	西暦	所蔵	備考
1	秀利袖之錦	A1	なし	なし	論者	
2	敵討袖之錦	A1	安永3	1774	個人蔵	
3	武道綴錦	A1	文政10	1827	菊池庸介氏	
4	兵法修練記	A1	なし	なし	弘前図書館	W913.56/435
5	兵法修練談	A1	寛政7	1795	熱田文庫・菊田	熱田文庫 和30-2
6	兵法修練談	A1	なし	なし	弘前図書館	W913.56/444
7	兵法修練談	A1	なし	なし	弘前図書館	W913.56/445
8	兵法修練談	A1	なし	なし	個人蔵	
9	兵法修練談	A1	なし	なし	個人蔵	
10	兵法修練談	A1	不明	不明	論者	「紀元2334年写」
11	武道小倉袴	A2	天保5	1834	金沢大・北條	1門50類161号
12	武道小倉袴	A2	弘化2	1845	菊池庸介氏	
13	武道小倉袴	A2	なし	なし	黒川村公民館	～巻13, (362-75-4)
14	武道小倉袴	A2	なし	なし	東洋文庫・藤井	VII-2-F-f-1007
15	武道小倉袴	A2	なし	なし	論者	～巻5,
16	寛永兵術論	A3	なし	なし	論者	端本,
17	袖錦岸柳島	A3	寛政9	1797	関西大・中村	L24**14-37*1～3
18	袖錦岸柳島	A3	享和2	1802	論者	
19	袖錦岸柳島	A3	安政5	1858	愛泉大	9136-1～3-68
20	袖錦岸柳島	A3	なし	なし	飯田市立図書館	10-156-6.1～6.6
21	袖錦岸柳島	A3	なし	なし	論者	
22	袖錦岸柳島	A3	なし	なし	論者	～巻2,
23	袖錦岸柳島	A3	なし	なし	論者	巻9のみ,
24	二島英勇記	B	文政5	1822	個人蔵	巻5～10, 刊写本,
25	二島英勇記	B	文政13	1830	論者	刊写本,
26	二島英勇記	B	嘉永4	1851	論者	読本→実録(第三章)
27	巖流記	B1	なし	なし	名雲書店	画像での確認,
28	佐々木眼流之敵討	B1	明治5	1874	論者	
29	岸柳島敵討実録	B1	天保7	1836	三原市立図書館	913.7/A(222-126-7)
30	眼流島敵討	B1	嘉永2	1850	九州大・檜垣	檜垣 カ-83
31	眼流島敵討	B1	慶応3	1867	論者	
32	眼流敵討之事	B1	天保13	1842	九州大・檜垣	檜垣 カ-81
33	眼流島敵討	B1	なし	なし	津山郷土・愛山	愛山 210/91
34	岩流島敵討	B1	なし	なし	九州大・檜垣	檜垣 カ-82
35	宮本武蔵敵討 上下	B1	天保4	1833	鳥取県立図書館	(363-116-1)
36	宮本武蔵敵討 全	B1	寛政2	1790	鳥取県立図書館	(363-116-2)
37	敵討眼流島	B1	明治17	1884	京都大・谷村	4-41/カ/1
38	佐々木巖流(双島志俗豪傑)	B2	なし	なし	鳥取県立図書館	(363-120-2)
39	双島志俗豪傑	B2	天明1	1781	秋市立図書館	410-23
40	双島志俗豪傑	B2	文政13	1830	論者	
41	双島志俗豪傑	B2	万延1	1860	論者	
42	双島志俗豪傑	B2	元治1	1864	個人蔵	
43	双島志俗豪傑	B2	明治3	1872	菊池庸介氏	
44	敵討巖流島実録	B2	なし	なし	論者	
45	宮本佐々木英雄美談	C1	なし	なし	関西大・中村	L24**14-246*1-1～5 L24**14-246*2-1～5

【凡例】 *書名の旧字体は新字体に統一した。

*年記については、書物のいずれかに書かれた年を記している。書写年とは限らない可能性もある。

*請求記号の()は国文学研究資料館所蔵マイクロフィルムを示す。

では、順に各系統の内容と特徴を見ていきたいが、C1系統『英雄美談』については、1. A系統の実録に加えて読本『絵本二島英勇記』もふまえることから、まずA・B系統の特徴を把握したいこと、2. 『英雄美談』はボール表紙本『絵本英雄美談 全』（辻岡文助、明18・7）などで既に活字化されていること、3. 『英雄美談』の分量が膨大であること、以上の理由と紙幅の都合から、本稿では触れないこととしたい。底本は基本的に年記の早いものを用いたが、A1系統は前掲山本氏論考で示された書名との対応から、煩雑さを避けるために『兵法修練談』を用いる。また、項目に梗概と登場人物を掲げてはいるが、同じ系統の中で細かく分けるに至った差異について特に抽出したため、省略した部分もある。本文の翻刻・公開は、今後適宜行っていきたい。なお、外題、内題以外の旧字体は新字体に改めた。

二-1 A系統

【A1】『兵法修練談』（寛政七年写、熱田文庫（菊田家）蔵）

○巻 冊…一巻一冊

○外 題…兵法修練談

○内 題…兵法修練談

○書写 年…寛政七年（寛政七年卯十二月上旬写之）

○総目録…

塚原卜伝修練の事

佐々木岸柳沢田左衛門に仮名を譲り江戸^江出し盛衰之事

飯の佐々木岸柳宮本武蔵仕合之事

宮本武蔵目黒道にて狼藉に出遊事

宮本武蔵佐々木岸柳仕合之事

○梗概：

塚原卜伝は土佐生まれの無手勝流を名乗る劍客。乗合の船で大男が直言を吐き、たしなめた卜伝と島で試合をすることになる。大男が先に船から降りて卜伝を急かすが、卜伝は「無手勝流は心を静める必要がある」と述べ、櫓で船を押し出して大男を置き去りにする。卜伝の門人、江戸の石川郡東斎巖龍は卜伝流を極め、郡東斎の門人に二刀流を極めた宮本武蔵がいる。肥後熊本の佐々木久三郎は岸の柳の動きを見て奥義を悟り、「岸柳」と名乗って日本一を自負する。岸柳と巖龍とで音がかぶることから、岸柳は郡東斎が邪魔。門人第一の沢田奎左衛門を偽岸柳とし、門弟の青山文平・神田左吉を付けて江戸へ遣わし、郡東斎を挑発させる。偽岸柳は看板を掲げ、男伊達にも勝利して門人が増える。小石川の役人が偽岸柳を招いて家中の者と種々の試合をさせ、郡東斎の門人菱田主膳、夏川庄左衛門が敗れる。しかし、年若の辻文治郎が青山文平を倒す。老齢の郡東斎は報告を聞いて悩むが、武蔵が対応を引き受け、郡東斎は喜んで武蔵を送り出す。武蔵は偽岸柳を倒し、看板を持ち帰る。偽岸柳は目黒不動尊参詣帰りの武蔵を襲うが、返り討ちにあう。武蔵は数人を殺害したため主家には戻れないと思い、武者修行に出て真の岸柳を訪うことにする。武蔵は熊本の岸柳を尋ねるも、関東に上った岸柳と行き違いになる。関東に上る武蔵は津山で城主森大内記に招かれ、折良く津山にいた京の劍豪吉岡憲法と仕合をする。抜き合いで憲法の鉢巻に血が付き、武蔵の勝ちと思われたが、武蔵の鉢巻にも遅れて血が付いて引き分けとなる。憲法は元来紺屋で染め物をしていたが、糊にたかる蠅を篋で打ち落とす内に奥義を極めた。京に戻った憲法は同輩の千葉幸内と諍いになり、幸内は御所観覧中の憲法の頭を門弟に十手で打たせる。恥と思った憲法は家に戻って刀を隠し持ち、引き返して内裏で大暴れする。憲法は討ち死に。武蔵は大坂から乗った船で岸柳を見つけ、二人は戦うことになる。武蔵は船頭から櫓を買い取り、それを切り落として左右の手に持って戦う。武蔵に打たれた岸柳は武蔵にとどめをさすよう頼み、近寄った武蔵の足を払おうとするが、武蔵は跳び避けて岸柳にとどめを刺す。武蔵は大坂の久世因幡守へ報告する。

○登場人物…塚原卜伝、石川郡東斎、宮本武蔵、佐々木岸柳、沢田奎左衛門、青山文平、神田左吉、菱田主膳、夏川庄左衛門、辻文治郎、森大内記、吉岡拳法、千葉幸内 など

○別書名…敵討袖之錦、秀利袖之錦、武道綴錦、兵法修練記

○備考…前掲山本卓氏「解題」（『大惣本稀書集成』）は「管見の内には享和元年書写を明示するものもあり、寛政以前の成立といえよう」としているが、本書と内容である『敵討袖之錦』（個人蔵）に「安永三甲午年菊月廿五日書留ル杉延岩松」と安永三年「一七七四」の年記があるため、実録の筋としては安永頃には成立していたと思われる。

【A2】『武道小倉袴』（弘化二年写、菊池庸介氏蔵）

○巻 冊…十卷二冊

○外 題…武道小倉袴

○内 題…武道小倉袴

○書写年…弘化二年（「弘化二ツといふとし」）

○総目録…

巻一 塚原卜伝が事

巻二 江州矢橋の渡_ニて卜伝明智之事

巻三 佐々木岸柳が事

巻四 沢田奎左衛門が事_{并ニ}江戸男伊達之事

巻五 佐々木岸柳男伊達を仕伏る事_{并ニ}泥沼勘太夫が事

水野隼人正殿_ニ而仕合の事

卷六 水戸公御屋敷^ニ而仕合之事^{并ニ}辻文治郎が事

夏川庄左衛門立合の事^{并ニ}岸柳弓の仕合に勝事

卷七 辻文次郎感賞に預る事^{并ニ}巖龍評議の事

宮本武蔵心免流自号の事^{并ニ}石川巖龍一子相伝称美の事

卷八 宮本武蔵岸柳立会の事

行人坂の事

卷九 作州津山森大内記殿家中名士の伝之事

卷十 吉岡憲法即飯篋之事^{并ニ}憲法小紋の事

宮本武蔵佐々木岸柳試合の事^{并ニ}岸柳島と名付る事

○登場人物：『兵法修練談』とほぼ同じ

○別書名：現段階では未確認

○備 考：物語の大筋と登場人物はA1系統と大きく変わらない。しかし、所々に細かい設定や説明、趣向が付加

されたり、あるいは設定に差異がある点も見られる。全てではないが、具体例を以下に示す。⁽⁹⁾

・剣術道場の先輩が屋敷で高慢な岸柳の暗殺を企てるも、盃に入った水に映って失敗する。

・武者修行中の武蔵が膏藥貼りの武術者竹の内加賀之助と仕合い、勝利する。

・吉岡兼房が内裏で「鶏り合」を見ていたとき、千葉幸内の門弟に打たれる。

【A3】『袖錦岸柳島』（寛政九年写、関西大学図書館中村文庫蔵）

○巻 冊：三卷三冊

○外 題：袖錦岸柳嶋

○内 題…袖錦岸柳嶋

○書 写 年…寛政九年（寛政九年巳十二月）

○総 目 録…（ ）は本文中にはあるが総目録で抜け落ちている章題を示す。

上巻 劍術四天王之事^附 似せ岸柳江戸^江居住之事

岸柳小笠原之屋敷^二而仕逢之事^附 宮本三之助由来之事

宮本武蔵江戸^江来^ル^附 武蔵岸柳仕合之事

中巻 目黒行人坂にて武蔵岸柳勝負之事^附 国光之刀由来

宮本武蔵武者修行之事^附 大津小道にて井上丹治に逢事

武蔵播州姫路にて安田半左衛門に出合事^附 兵庫浦にて舟頭狼藉之事

津山城下にて居へ切之事^附 京都吉岡兼房が事

（早川不破集て居へ切に出る事^附 兼房武蔵仕逢之事）

下巻 京都山内権太夫が事^附 吉岡兼房討死の事

岸柳宮本三之助を殺す事^附 井野上丹治忠義之事

丹治国光の刀取戻ス事^附 武蔵長州下の関^二逗留之事

武蔵岸柳と島にて勝負の事^付 武蔵帰参の事

○梗

概…

將軍家光が石川軍東齋に劍術四天王の優劣を問い、吉岡兼房を第一、宮本武蔵を第二、軍東齋を第三、佐々木岸柳を第四とする。恨みに思つた岸柳は門弟第一の佐々木左衛門を偽岸柳とし、鷺田文平、青山佐吉と共に江戸に送り、隙あらば軍東齋を討つよう命じる。小笠原家は軍東齋の門弟が多いが、山中左仲は偽岸柳に師事。偽岸柳は広言を吐いて注目を集め、小笠原家に招かれて仕合をする。小笠原家家士の片山十内、峯切弥左

衛門、中村安右衛門は偽岸柳に敗れるが、年若の宮本三之助が鷺田文平に勝利。三之助は武蔵の養子、筑前天狗山で旅をしていた武蔵が、死んだ父を斬って運ぼうと夜中に刀を研いでいた三之助を養子とした。三之助の報告を聞いた軍東斎は豊前小倉にいた武蔵を呼び寄せ、岸柳の処置を任せると、敗れた時のことを考えて武蔵を破門する。武蔵は偽岸柳を倒し、山中で襲ってきた偽岸柳一味も返り討ちにするが、その際に左仲に名刀国光を奪われる。国光は主君からの預かりもの、武蔵は刀と真の岸柳を捜す武者修行の旅に出る。途中、かつての同輩井上丹治と再会、丹治が武蔵に仕えることになる。武蔵が真の岸柳、丹治が国光を探し、途中様々な苦難に遭う。武蔵は津山で京の剣豪吉岡兼房と仕合うことになり、引き分ける。京に帰った兼房は同輩の山内権太夫と諍いを起こす。ある日、兼房が内裏で鶏合をみていたところを権太夫が彼の門弟に打擲させる。兼房は一度家に戻ってから刀を隠し持って引き返し、内裏で暴れた後に自害。一方、養父の武蔵を捜す三之助は偶然岸柳と同じ宿に泊まり、岸柳を討とうとするも返り討ちに遭う。小道具屋に化けた丹治は情報を探り、国光の刀を売ろうとした左仲から刀を取り返す。小倉へと向かう船中で武蔵は岸柳を発見、二人は島で戦い、武蔵は養子三之助と自分の名の仇として岸柳を討つ。武蔵は小笠原家に帰参する。

○登場人物：徳川家光、石川軍東斎、佐々木岸柳、佐々木左衛門（偽岸柳）、鷺田文平、青山佐吉、山中左仲、片山十内、峯切弥左衛門、中村安右衛門、宮本三之助、宮本武蔵、井上丹治、吉岡兼房、山内権太夫 など

○別書名：寛永兵術論

○備 考：物語の筋はA1系統と類似するが、異なる箇所も散見される。相違については次頁の対照表（表2）を参照して頂きたい。にせ岸柳や吉岡との仕合、吉岡の内裏での奮戦、武蔵と岸柳との決闘、といった大まかな筋は共通するものの、ト伝譚と剣術四天王の優劣、〈岸柳改名〉の趣向が場面ではなく偽岸柳（李左衛門）の大言に組み込まれること、辻文治郎と宮本三之助、名刀の国光を奪われる趣向、武蔵に仕える丹治の存在、千葉幸内と山内権太夫など、物語のはじまり方や物語内の趣向、設定、人物名などに違いが見える。

表2 『兵法修練談』『袖錦岸柳島』対照表

『兵法修練談』	『袖錦岸柳島』
<ul style="list-style-type: none"> ・塚原卜伝の来歴と智勇。 ・佐々木が岸の柳を見て奥義を悟り、岸柳と改名。 ・岸柳が沢田左衛門を偽岸柳として江戸に遣わす。 ・偽岸柳の大看板を見て男伊達たちが挑む。 ・小石川の役人の前で仕合う。 ・郡東斎の門弟が数人敗れるが、辻文治郎は勝利。 ・辻文治郎が郡東斎に報告。 ・武蔵が郡東斎の名代として偽岸柳に勝利。 ・武蔵は偽岸柳に行人坂で襲われるが返り討つ。 ・武蔵は武者修行に出て本物の岸柳を探す。 ・津山で吉岡憲法と仕合い、引き分ける。 ・憲法は京で千葉幸内と諍い、内裏で暴れて討ち死に。 ・岸柳を見つけた武蔵は島で仕合い、武蔵が勝つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・家光が軍東斎に剣術四天王を尋ね、岸柳は四番手。 ・岸柳は佐々木左衛門を偽岸柳として江戸に遣わす。 ・小笠原家で偽岸柳と軍東斎門下の家士が仕合う。 ・数人が敗れるが、武蔵の養子三之助は勝利。 ・三之助が軍東斎に報告、軍東斎は武蔵を呼び寄せる。 ・武蔵が軍東斎の名代として偽岸柳に勝利。 ・武蔵は偽岸柳に行人坂で襲われるが返り討つ。 ・襲われた隙に主君から預かった刀を左仲に奪われる。 ・武蔵は刀と真の岸柳を捜し、武者修行に出る。 ・同じ家中にいた井上丹治と再会、丹治は武蔵に仕える。 ・武蔵は津山で吉岡兼房と仕合い、引き分ける。 ・兼房は京で山内権太夫と諍い、内裏で暴れて討ち死に。 ・岸柳が襲ってきた三之助を殺害。 ・丹治が左仲から刀を取り返す。 ・岸柳を見つけた武蔵は島で仕合、武蔵が勝利する。

以上、A系統を概観してきた。A1『兵法修練談』と大筋は変わらずに人物の細かい説明や趣向が加わるのがA2『武道小倉袴』である。物語の中に岸柳や武蔵のそれぞれの武芸者としての実力を示す場面が挿入されることを鑑みると、人物設定を補って長編化させ、さらに武芸者を多く登場させて聴衆を楽しませる点で講談にも通ずるところがある。また、A3『袖錦岸柳島』は『兵法修練談』と物語の筋が類似するものの、設定や登場人物名に相違が確認できる。

二一2 B系統

【B1】『宮本武蔵敵討』（寛政二年写、鳥取県立図書館蔵）

○巻 冊…一巻一冊

○外 題…宮本武蔵敵討

○内 題…なし

○書 写 年…寛政二年（寛政貳年／戊五月日写之／布袋村／木下氏）

○目 録…

宮本武蔵敵討之事

吉岡多郎左衛門横死之事

宮本武蔵武者修行之事

佐々木眼流小倉にて改名之事

宮本武蔵官太夫に対面之事

○梗

概…

吉岡多郎左衛門兼房は鬼一法眼の末流、芸州毛利輝元に仕える。兼房が摂州有馬で湯治した折、近江の浪人佐々木眼流が姫路城主木下肥後守に抱えられ、家中の剣術師範をしていた。兼房の旅宿が眼流の屋敷の隣、粗忽な下部が眼流の屋敷の柿を取る。眼流は怒って怒鳴り込み、兼房も詫びるが手討ちにすると息巻く。譲らない眼流に兼房が相手になると述べ、双方の主君に報告、肥後守は仲裁しようとするが眼流は聞き入れない。二人は亀の甲島で木刀を使って戦い、兼房が二度勝利。肥後守は眼流の報復を危ぶみ、兼房の旅宿を警固させる。眼流は兼房の暗殺を目論み、芸州に忍び行く。二十六夜の月待帰りに兼房は闇討ちに遭う。吉岡の隣家の草履取り七助は雨中の買物帰りに兼房を見かけ、挨拶を面倒に思っ隠れていて闇討ちを目撃。輝元は下手

人を捜させるが不明。七助は身を危ぶんで口をつぐむ。兼房の妻は夫の死を聞いて病死。吉岡の長男又太郎は三年前に死去、次男貫次郎は兼房の門弟宮本武右衛門の養子となつて肥後熊本加藤家に仕えていた。兼房死去の一報を聞いた貫次郎と武右衛門は落ち込むが、君主の加藤清正は養子となつたため実父の仇討ちができない貫次郎に武者修行を命じる。貫次郎は武蔵と改名して武者修行に出る。途中、賊に攫われた女を助けて村に送り届けると、亭主に留められる。翌日、四方山話をしていると、亭主が実は七助で兼房が闇討ちされた場面を見ていたことを話す。武蔵は七助と二人で仇を捜す旅に出る。眼流は大塚官太夫と名を変え、豊前小倉で刀の目利きなどをして暮らす。備前長光の目利きや赤豆長光の話から、黒田甲斐守は官太夫を気に入って召し抱える。武蔵が噂に聞いた官太夫を訪ねたところ、七助が彼こそ下手人と武蔵に報告。七助は眼流が落とした小柄を拾っており、官太夫の服の紋と小柄の紋が同じという証拠を示す。官太夫が仇と定まった武蔵は決闘を申し込み、互いの主君に報告。黒田甲斐守は筋が違ふと官太夫を守ろうとするが、毛利の家臣毛利勘解由左衛門に論破され、承諾。小倉の北東にある島で二人は戦い、武蔵は眼流を討ち果たす。主君清正も喜ぶ。

- 登場人物…吉岡多郎左衛門、毛利輝元、佐々木眼流（大塚官太夫）、木下肥後守、七助、宮本武右衛門、宮本武蔵（貫次郎）、加藤清正、七助の娘、黒田甲斐守、毛利勘解由左衛門 など
- 別書名…眼流島敵討、眼流敵討之事、佐々木眼流之敵討、岸柳島敵討実録 など

【B2】『双島志俗豪傑』（天明元年写、萩市立図書館蔵）

- 巻 冊…十卷一冊
- 外 題…雙島志俗豪傑
- 内 題…双嶋志俗豪傑
- 書写年…天明元年（「天明改元夏至五月十日 仕学堂主人謄写」）

○総目録…

卷一 吉岡兼房毛利^江仕官之事

卷二 木下家定姫路在城之事^并佐々木巖流師範之事

佐々木巖流立腹之事^并兼房下部が誤り侘る事

卷三 木下肥後守評議之事^并佐々木吉岡登城之事

兼房巖流嶋^三而仕合之事

卷四 瀧五郎左衛門旅宿を固る事

吉岡兼房横死之事^并宮本武左衛門願書之事

卷五 加藤清正仁心之事^并宮本武蔵発足之事

武蔵井山盗人を誅する事

卷六 花房介兵衛陣中一見之事^并上杵上意被蒙る事

卷七 宮本武蔵雷火咄之事^并七助仇行被留る事

宮本武蔵九州立帰る事

卷八 巖流刀目利之事

黒田長政官太夫抱給ふ事^并小豆長光由来之事

卷九 武蔵官太夫と初て出合之事^并七助敵を見出す事

武蔵再び巖流をためす事^并立合願上る事

卷十 加藤清正三士を小倉^江遣す事^并益田越中長政言込る事

黒田殿木刀工夫之事^并武蔵巖流仕合仇討之事

○登場人物…吉岡太郎左衛門兼房、毛利輝元、佐々木巖流（佐々木官太夫）、木下肥後守、七助、宮本武右衛門、宮

本武蔵（友次郎）、加藤清正、花房助兵衛（武蔵の養母の弟）、豊臣秀吉、上杉景勝、瀧（七助の娘）、娘（武蔵と瀧との娘）、黒田甲斐守、毛利勘解由左衛門 など

○別書名：敵討巖流島実録など（表1・37は外題が『佐々木巖流』で内題が『双島志俗豪傑』）

○備考：物語の大筋はB1の『宮本武蔵敵討』と同様であるが、ディテールや趣向が付加された部分が見える。

現段階で確認し得た諸本では、『双島志俗豪傑』の方が年記が早く、あるいは『双島志俗豪傑』の趣向を省いた可能性も排除できない。『宮本武蔵敵討』と『双島志俗豪傑』との差異は以下の通り。

- ・兼房と巖流が戦った島が、『宮本武蔵敵討』は「亀の甲島」、本書は「比能島」。
- ・『宮本武蔵敵討』では清正から〈武者修行〉の話が出たが、『双島志俗豪傑』では、まず武蔵から〈仇討ち〉を願い出て、清正が〈武者修行〉を許す展開となっている。
- ・武蔵の養母の弟花房助兵衛が登場。秀吉の小田原攻めに参加した助兵衛を武蔵が訪う。諸将が陣中で能を観覧したことを助兵衛が罵倒。秀吉の耳に入り、助兵衛の主上杉景勝が叱責されるが、最後には許される。
- ・『宮本武蔵敵討』では賊から助けた女が七助の娘であったが、『双島志俗豪傑』では賊から助けた女と七助の娘とは別人の設定。七助の娘は瀧という名前で、かつて宮本家に奉公した時に武蔵と恋仲になって懐妊したものの、暇を出されて故郷で娘を産んだ。その縁で七助から兼房閨討ちの話を聞くことになる。
- ・武蔵が「雷火」を怖がる話から、七助が兼房閨討ちの場面を目撃したことを話す展開となっている。なお、前掲菊池氏論考（「実録と絵本読本」）が本書を『絵本二島英勇記』の種本と判断した根拠が、この場面である。ただし、『佐々木巖流』（鳥取県立図書館蔵、内題…双島志俗豪傑）では、「雷火の咄」が掲載されておらず、写本によって増減がある点は注意する必要がある。

B1『宮本武蔵敵討』とB2『双島志俗豪傑』の大筋はほぼ変わらないが、備考に示した通り、細かい点で差異が散

見される。『双島志俗豪傑』では武蔵が七助の娘「瀧」と恋仲になって娘が産まれる点が大きな違いといえよう。本文には、「宮本武右衛門方に望之由^三而奉公しけるに、主人之氣に入三ヶ年も勤居る内、武蔵部屋住のつれづれに手をかけし所、懷妊に及びければ、武蔵両親の手前を思ひ憚る所^三、両親此事をさと、夫となく暇を遣しける」とある。『双島志俗豪傑』に依拠した読本『絵本二島英勇記』ではこの設定が取られておらず、読本で七助の娘「巻」と恋仲になったのは無三四の養父宮本武右衛門の家士日下幸助であった。幸助は後に七助の婿となって十助と名乗っている。『双島志俗豪傑』の武蔵像は「英勇」と見做されなかったのか、当時の「英勇」像を考える上で興味深い。

以上、A・B両系統の〈武蔵もの〉実録について整理した。近世の〈武蔵もの〉実録には、これら数種の内容や特徴があることを認識し、それぞれの違いを把握しておく必要がある。名古屋の貸本屋、大惣の目録『大野屋惣兵衛蔵書目録』第十五冊¹⁰には、

袖錦岸柳島	五
同 本	三
同 本	
敵討巖流島	三
豪傑雙嶋志	五
同 後篇	一
同 (兵法修練談 書 秀利袖の錦	一 六

とあり、これまでに見てきたA・B両系統の〈武蔵もの〉実録の書名が並んでいる。「兵法修練談」と「秀利袖の錦」とを「同書」としており、写本で伝わる実録というジャンルでは同じ内容でも書名が一樣でないことは常識であった。

右の大惣の目録がいつ頃このラインナップになったかは判然としないものの、数種の〈武蔵もの〉実録が並記されるところを見ると、種々の〈武蔵もの〉実録が貸本によって親しまれていたことの証左になると思われる。

三 実録から読本、読本から写本へ

次に、これまでに〈武蔵もの〉実録の内容や特徴をふまえて分類を行ってきた結果、写本——特に実録——と刊本との相関関係について気付いた点を少し述べたい。

近世期に書写された写本の中には「刊写本」と呼ばれる種類のものがある。「刊写本」については、林望氏「嵯峨本を読む——本阿弥光悦の印刷工房^①」が「たとえば、江戸時代に、本を買えなかった人々が人から刊本を借りて、それを忠実に筆写したものがたくさんある。これは写本でありながら内容上は刊本に過ぎぬもので、こういうのは「刊写本」と呼ばれる」と紹介される。そして〈武蔵もの〉に関しても、表1でBと示したような、読本『絵本二島英勇記』の「刊写本」と思しき写本が確認できる。ただしここでの問題は、林氏の述べるところの「刊写本」のように、刊本を「忠実」に「写」したわけではない写本も存在する。このことについて、以下紹介したい。

論者架蔵の『二島英勇記』なる写本が興味深い要素を有している。略書誌を以下に示す。

○巻 冊…三卷三冊（上巻総目録の下に割書で「全部五巻 今為三巻」とあり、元は五巻構成であったものを写す際に三卷三冊に改めたと思しい）

○外 題…二嶋英雄記

○内 題…二嶋英勇記（上巻）、二嶋英雄記（中・下巻）

○書 型…半紙本（縦二十四・〇×横十七・二糎）

○書 写 年…嘉永四年（嘉永四年辛亥／正月吉辰）

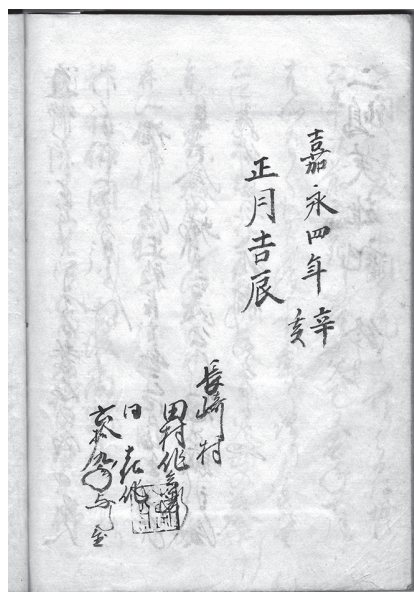
○備 考：「長崎村／田村作兵衛／同 喜作／六拾九、
年写し置」（巻末）

さて、本書の位置づけとしては、嘉永四年「二八五二」の
年記から、i. 〈武蔵もの〉実録、ii. 読本『絵本二島英勇
記』の刊写本、iii. 読本『絵本二島英勇記』の抄録（ダイ
ジェスト）、という推測が立つ。

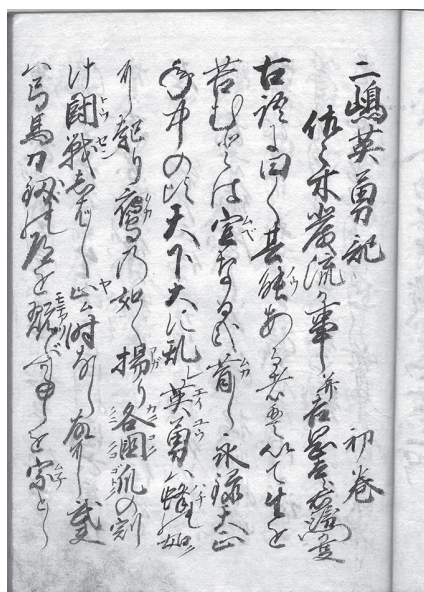
まず i について。本書の総目録を次頁の表3の upper 段に示し
た。第一章で触れた「無三四」という名前の表記や「白倉」
「笠原」といった登場人物名から、一瞥していわゆる〈武蔵
もの〉実録ではなく、読本『絵本二島英勇記』の影響を受け
た写本と解すことができる。すなわち、位置づけは i ではな
く、ii か iii になるかと思われる。そこで、読本『絵本二島英
勇記』の総目録（表3下段）と比較してみると、対応しない
箇所が見える。特に、傍線を引いた「穴間山中に鯨魚を殺す
事」や「無三四天狗山伏に遇ふ事」といった、幕末期におい
て浮世絵の題材にもなった著名な無三四の武勇譚が削られて
いる点が興味深い。

加えて、両書それぞれの本文巻頭を対照させると、以下の
通りになる。¹³⁾

○古語に曰く、其^②能ある者は以て生を苦むとは^①宜なる



写本『二島英勇記』下巻巻末（架蔵）



写本『二島英勇記』上巻本文巻頭（架蔵）

表3 写本『二島英勇記』と読本『絵本二島英勇記』の総目録

写本『二島英勇記』惣目録	読本『絵本二島英勇記』惣目録
上巻	巻一
佐々木巖流が来 _レ 由	佐々木巖流之事
吉岡太郎右衛門が由来	吉岡太郎右衛門の事
吉岡与 _二 佐々木 _一 争論	吉岡佐々木巖流と争論之事
吉岡打 _二 倒巖流 _一	吉岡佐々木巖流を打倒す事
巖流闇 _二 討吉岡 _一	巖流吉岡を闇殺之事
宮本友治郎逢 _レ 難	宮本友次郎難に逢ふ事并 _二 難を脱るゝ事 _一
友治郎再逢 _レ 難并 _二 二刀流之起リ _一	友次郎再難に逢ふ事并 _二 二刀流の起原の事 _一
名嶋高弟遣 _二 書熊本 _一	名嶋の高弟書を熊木に遣す事
中巻	巻四
宮本父子願書書替	宮本復讐訴訟之事
并 _二 友治郎出 _二 武者修行 _一 并 _二 友治郎至名嶋祀亡父靈 _一	友次郎熊木発足の事并 _二 名嶋高弟宮本に会する事 _一
宮本無三四与 _二 白倉 _一 試 _レ 剣	宮本無三四白倉源五左衛門と剣を試る事
宮本無三四与 _二 白倉 _一 試合	宮本白倉源五左衛門と試合之事
同人乞 _二 白倉暇 _一 并 _二 師弟奸計 _一	宮本無三四辞 _二 白倉 _一 事并 _二 白倉師弟奸計の事 _一
白倉師弟饗 _二 応宮本 _一	白倉師弟宮本を饗膳の事
并 _二 無三四破 _二 浴室 _一 逢 _レ 難宮本山中而討 _二 於盜賊 _一	宮本無三四危殆を遁るゝ事
下巻	巻六
無三四到 _二 高田 _一 并 _二 発 _二 足作州 _一	宮本兇賊を於山中討つ事
宮本趣 _二 信笈 _一 并 _二 逢 _二 于笠原 _一	無三四美作を発足する事
宮本無三四着 _二 岸于九州 _一 并 _二 七助過破 _二 壮士之飯笥 _一	穴間山中に鮫魚を殺す事
七助夫婦連 _二 無三四 _一 婦旧里 _一	無三四天狗山伏に遇ふ事
并 _二 無三四実父聞 _二 横死嘶 _一	無三四笠原新三郎に遇ふ事
無三四伺 _二 佐々木官太夫 _一	無三四八人の壮士と争競を起す事
無三四討 _二 巖流 _一 報 _二 実父仇 _一	七助名島に還る事
自 _二 小倉家中 _一 護 _二 送無三四 _一	無三四露露話の事
并 _二 宮本無三四坂 _二 本国 _一	無三四佐々木官太夫を覗ふ事
無三四巖流を討事	無三四巖流に対面之事
山内堀の両士無三四を饗 _二 并 _二 護送の事 _一	無三四巖流を討事
宮本無三四始終之事	無三四巖流を討事
無三四巖流を討事	無三四巖流を討事
無三四巖流を討事	無三四巖流を討事
無三四巖流を討事	無三四巖流を討事
無三四巖流を討事	無三四巖流を討事
無三四巖流を討事	無三四巖流を討事
無三四巖流を討事	無三四巖流を討事

哉。昔し^③永禄天正年中の頃、天下大に乱れ、^④英勇は蜂の如くに起り、鷹の如く揚り、各国瓜の割け、鬪戦しばく止む時なし。

(写本『二島英勇記』)

○不材之木は無用なるが故に天年を得。主人之雁は不材なるを以て死さる。莊周は其間に処ん事を取れり。①嗚呼宜なるかな。②能ありてよく勝れたるも禍ひの端なり。諸葛武侯が賢なるも。畢に五丈原に心志を勞して。其終りを能する事あたはず。荊何が刺に於る。その刺のために死す。是所謂^②其能を以て其生を苦しめらるゝ者也。爰に本邦足利家の霸權一たび解け。應仁より以降。③永禄天正の頃にいたり。④天下の英勇蜂のごとく起り。鷹のごとく揚りて。各国瓜のごとくに割。鬪戦しばく止む時なし。

(読本『絵本二島英勇記』)

写本と読本の本文とで共通する語彙が確認できるものの、読本で長々と記された故事を写本では「古語に曰く」と省略している。これらのことを鑑みると、該本はiiにあげた「忠実」な刊写本でもない。

では、iiiの「抄録」の可能性について。検討のために白倉源五左衛門と無三四が邂逅した際の場面を取り上げたい。読本『絵本二島英勇記』巻之五「宮本与白倉源五左衛門「試合事」」に、以下のように描かれる。

却説白倉源五左衛門は、宮本が年齢いまだ稚を慢り、何程の事か有べしと思ひしが、思慮の外なる其動作に恐懼し、暫時刻をうつすといへども、仕出したる上計も発せず。そのみならず、門人の思ふ所も恥かしく、渋りながら座を立、頓て圍の内に入て、「去来一剣を試むべし。」

(巻之五)

武者修行中の無三四に試合を挑まれた白倉がしぶりながら勝負を受けるといふ展開になっている。一方で、写本『二島英雄記』の該当箇所にあたると、次のような描写である。

白倉、庭前の松木に鳩数拾禽飛来るを見て、源五左衛門無三四に向ひ、「然らば貴殿ニ某が弓術を見スべし。」と、若党に弓箭を申付る。

一説曰、白倉弓は「飛鳥を射て宮本を驚さん。」との下心なり。

間もなく弓箭を出せば、白倉暫くねらふてヒヤウと放せば、遙か高きに遊ぶ鳩の胸板射抜きたり。

(中巻)

つまり、白倉は無三四を驚かせて勝負を優位に運ぼうとし、まず庭にいる鳩を弓で射て落とす。しかし、その様を見た無三四は驚くどころか、白倉に対して「先生未ダ弓道ニ暗し」と述べた上で、

「弓術は兎もあれ戯し飛鳥を射、殊更鳩は八幡大菩薩の愛鳥ニ而神仏の使者なり。古人鳩の詩ニも社前社後喜し得し伝と云り。其ノ八幡宮の愛鳥を殺し、豈神罰を蒙らザらんや。又仏語ニは一枝ヲ切ル事一指ヲ切ルが如しと云り。又五寸の虫ニは五分の如来胸中ニ在スとかや。故ニ生あるものノ胸射る事仏神の専ら惡ム処なり。夫レ我朝は神国也。神仏の愛隣なくして長久を保がたし。故ニ御辺の弓術奇とするに足らず。」

(中巻)

と、鳩が武士の守り神である八幡大菩薩の愛鳥であることを論じ、鳩を射た白倉を痛烈に批判する。この無三四の様相は、実は読本『絵本二島英勇記』に影響を受けた歌舞伎『敵討巖流島』(文化五年上演)に見ることができる。すなわち、『敵討巖流島』三幕目の場面に、次のようにある。

傳五 オ、幸ひ。あの松ヶ枝に群がる鳩、かけ鳥の一矢、御覧に入れん。(中略)

傳五 鳩はつと飛び去る所を、矢を放つ。詭への合ひ方、鳩一羽、矢に貫かれて、落ちる。源蔵、取つて来て、傳五右衛門の前へ置き、上手へ行く。(中略)

無三 かやうな未熟不鍛錬な仁の門弟には、えゝなりますまい、(中略)

傳五 当国の師範たる身共、未熟不鍛錬とは、ナ、何を以て(中略)

無三 すべて鳥類を射るには、羽を縫ふか、又その尾先、足なぞを射止め、鳥の命を取らぬが弓矢の秘密、秘授口伝。殊更鳩は正八幡の使はしめ、弓矢神とあるからは、武家に於いては、鳩の命を取らぬが故実、それになんぞや、鳩の只中を射通したるは、未熟のこれ第一。

(『敵討巖流島』三幕目)

白倉傳五右衛門が弓箭で鳩を射て武芸を誇るが、無三四は驚くこともなく「武家」は「鳩の命を取ら」ないと述べて、白倉を「未熟」と断ずる。写本『二島英勇記』の特徴と一致している。このことから、写本『二島英勇記』が読本に拠りつつも、《武蔵もの》を題材とした歌舞伎作品から趣向を摂取していると判明する。

加えて写本では、吉岡太郎右衛門が巖流に闇討ちされた際、後に無三四と改名する実子友次郎が夢を見る。

友次郎申けるは、先日より折々心さわぎして、心中案スからず。然るに昨夜不思議の夢を見たり。其故に名嶋^ニある実父^①肩^{ツノ}ニ大イ成角を生ながら獅子^{ライ}ニ乗ルと見えけり。覺て後肉^サク動き、今に心さわぎするは、吉凶如何かあらん、と申ければ、武右衛門暫ク工夫して、眉^ヲひそめて曰ク、是甚心得ざる夢也。^②其訳は角と云字は刀を用ゆると書たる字也。又人間に角の生ずる道理なし。

(上巻)

友次郎が見た夢は、実父吉岡が肩に「角」が生えた獅子に乗るというものであつた。しかし、この趣向は読本、歌舞伎のどちらにも見ることができない。該当箇所を以下に掲げる。

○友次郎申けるは。我^{われ}先日より折々心さはぎし。さまぐの雜夢^{ぞうむ}を見るゆへに。夜は安^{やす}く寝^ねこと能^{あた}はず。夜前名嶋^{よぜんなじま}にある所の実父^{じつふ}。吉岡太郎右衛門。大きな野猪^{いのしし}に乗て山にのぼると夢みたり。覺て後肉^{さめ}うごき。今に心さはぎするは。吉凶^{きつぐう}いかなる兆^{しるし}ならんとかたり出せば。

(絵本二島英勇記) 卷三

○友次 殊更昨夜船中に於いて、わが^{わが}見し夢に、某^{それがし}が実父^{じつふ}吉岡太郎右衛門どの、猪に跨^{また}がり山に登り給ふ。猪は即ち父の事。殊にこの獣は、只一筋の後へ帰らず、若しや老の身の^{おの}悩^{なや}み疲^{つか}れし有^{あり}様な事か。

(敵討巖流島) 二幕目

共に吉岡が「猪」に乗るというもので、「猪」と「獅子」とで動物に跨がる点で共通するものの、「角」という要素はどこからきたのだろうか。〈角が生える夢〉を見る趣向は、湖南文山著『通俗三国志』(元禄二年「二六八九」序) 卷之四十四「死孔明走^{セル}二 生仲達^{ハシラシムイケルヲ}」に見ることができる。以下に示す。

趙直^{チヤウチョウ}ガ曰、^①「ウレ今魏延^{ギエン}ガ陣^{チン}へ行タルニ、魏延^②「頭二角ヲ生ズ」ト夢ヲ見テ、我^{われ}二吉凶ヲ決セシム。我^{アヤシマ}ソノ怪ンコトヲ怕^{ヨソ}レ、詐^{イツワリ}テ、麒麟蒼龍ノ事ヲ云テ、彼ガ心ヲ安カラシム。」費禕^{ヒイ}禕^イガ曰、「コノ夢ノ吉凶、ソノ実^{ジツ}ハイカン。」

(卷之四十四)

趙直^{チヤウチョウ}ガ曰、「^②角ト云字ハ刀ヲ用フト書字ナリ。今頭ノ上ニ刀ヲ用ヒバ其凶ナルコト甚シ。」

(卷之四十四)

頭に〈角が生える夢〉を見た魏延が趙直に相談し、趙直は「麒麟」の夢で吉兆を表すとごまかすが、実は「角」は「刀」を「用」いるという字形のため、頭に「角」が生えるのは首が飛ぶことを示唆するのであつた。つまり、『二島英

勇記』が吉岡の「肩」に「角」が生える夢を描くのは、読本『絵本二島英勇記』で巖流が「吉岡が右の肩口に切込んだり」とある展開に通俗軍談の趣向を重ね合わせたといえるのである。よって、iiiの「抄録」にもあたらない。

以上のことから、写本『二島英勇記』は読本『絵本二島英勇記』に基づきつつ、歌舞伎や通俗軍談の趣向を新たに採り入れているとわかる。より詳しく述べると、実録写本『双島志俗豪傑』を用いて制作された刊本の読本『絵本二島英勇記』をベースに、「山鯨退治」や「天狗山伏」といった無三四の武勇伝を削り、あるいは「白倉との仕合」や「実父吉岡の夢」の場面に変更を加えたりして、すなわち、実録↓刊本の読本——（綯い交ぜ）↓写本といったプロセスで写本『二島英勇記』が成立したと考えられるのである。藤沢毅氏「刊写本について」⁽¹⁶⁾が、様々な刊写本を調査した上でその特徴や性質を明らかにしており、その事例に今回の例を突き合わせてみると、本書は「実録や通俗軍書の書式に則ったもの」であり、「厳密な意味で刊写本と言えるのかも疑問」な諸本といえよう。なぜこのような複雑な手続きが行われたかについて明確な説明はできないが、一方で、この写本の存在は近世における刊本、写本、演劇などの輻輳的な関係の多様さを示唆するように思われる。⁽¹⁷⁾

四 今後の課題

以上、本稿では〈武蔵もの〉実録が一樣ではなく数種の筋、特徴を有すること、類似した筋でも設定や趣向が付加される（あるいは省略される）こと、その特徴によって系統を分類することが可能であることを示した。そして、一見すると「実録」のように思える、単純には分類できない写本についても言及した。〈武蔵もの〉に限らず、近世の刊本と写本などの文字文化を念頭に置きつつ、検証していくことが重要と思われる。

今後は、〈武蔵もの〉実録の系統別の特徴を把握した上で、それらが後世——特に近世後期から幕末、明治期——の文芸にどのような形で受容されていったかを探っていきたい。

注

- (1) 加来耕三氏『宮本武蔵』という剣客——その史実と虚構』（日本放送出版協会、平15・1）、魚住孝至氏『宮本武蔵——「兵法の道」を生きる』（岩波書店、平成20・12）、大倉隆二氏『宮本武蔵』（吉川弘文館、平27・2）など。
- (2) 『日本古典文学大辞典⑤』（岩波書店、昭50・10）。
- (3) 『近世実録の研究』（汲古書院、平20・2）。
- (4) 『近世文藝』86（平19・7）所収。
- (5) 安田文吉氏『茲木曾山雪宮本』考 補遺——木曾山中の場をめぐる（『南山大学日本文化学論集』12、平24・3）。
- (6) 『京都大学蔵 大惣本稀書集成 写本小説』（臨川書店、平8・5）。
- (7) 『リテラシー研究』6（平25・1）所収。
- (8) 『日本架空伝承人名事典』（平凡社、昭61・9）「宮本武蔵」（高橋則子氏執筆）参照。
- (9) ただし、脱稿後に閲覧した天保五年「一八三四」の年記を持つ金沢大学附属図書館北條文庫蔵『武道小倉袴』には、特徴の三つの内後者二つが見られなかった。このことから、『兵法修練談』系の実録に徐々に武勇譚を増補したり細部の変更を加えていった実録が『武道小倉袴』系と考えるのが自然であろう。
- (10) 柴田光彦氏編『大惣蔵書目録と研究 本文篇』（青裳堂書店、昭58・3）。
- (11) 『書誌学の回廊』（日本経済新聞社、平7・7）。
- (12) 浮世絵の歌川国芳画「本朝水滸伝剛勇八百人一個 宮本無三四」および歌川国芳画「英雄日本水滸伝 宮本無三四」が無三四の「山鮫退治」の場面を描き、また歌川国芳画「宮本無三四」が無三四の「天狗山伏退治」の場面を描く。
- (13) 『絵本二島英勇記』の本文は架蔵本（半紙本、十卷十冊）に拠る。
- (14) 渥美清太郎氏編『日本戯曲全集③』（春陽堂、昭7・9）に拠る。
- (15) 『通俗三国志』の本文は架蔵本（大本、五十卷首一卷五十一冊）に拠る。
- (16) 『鯉城往来』5（平14・12）。
- (17) 刊本の小説から実録に影響を及ぼしたことについては、横山邦治氏「展開期の読本」（『読本の研究——江戸と上方と』、風間書房、昭49・4）が、刊本『絵本雪鏡談』を下敷きに人物名を改めて写本『金沢実記』が制作されたこと、また山本卓氏『元禄曾我物語』

致——浄瑠璃利用と実録への展開を中心に」(『国文学』68、平3・12)が、亀山の敵討ちの実録に浮世草子の趣向が用いられていること、倉員正江氏「野村増右衛門事件の転化」(『近世文藝』46、昭62・6)が、浮世草子『名物焼蛤』から実録『野村奸曲録』への影響を指摘している。また藤川玲満氏「『忠孝人竜伝』考」(『秋里籬島と近世中後期の上方出版界』、勉強出版、平26・11)は、秋里籬島著『忠孝人竜伝』(天明二年刊)と実録『敵討忠孝伝』(年記なし)とを比較し、「前後関係を明らかにするまでの証拠は見出されない」としつつ、「既存の実録を利用して『忠孝人竜伝』を著したことは強く推測されるところである」と述べる。文面からはこの「既存の実録」が『敵討忠孝伝』を指すかは断定できないが、「ほぼ全編にわたって内容は同一であるなか、目録・内容共『忠孝人竜伝』のほうが多」いとも記すことから、『忠孝人竜伝』に『敵討忠孝伝』が利用されたという意識があると推測される。しかし、本稿で述べた写本『二島英勇記』のように、刊本に依拠しながら内容を省き、さらに趣向に変更を加えるといった事例をふまえると(こちらは年記から前後関係は明らかに後と分かる)、写本『敵討忠孝伝』が刊本の抄録という可能性は無視できない。なお、高橋圭一氏「読本と実録」(『実録研究——筋を通す文学』、清文堂出版、平14・11)が実録『非莫不朽全書』と『忠孝人竜伝』との関係に言及している。

【附記】 本稿の執筆にあたり、山本卓氏、高橋圭一氏、井上泰至氏、藤沢毅氏、菊池庸介氏など諸先生、および資料の閲覧を許可して下さった諸機関から多大なるご高配とご教示を得た。末筆ながら謹んで御礼申し上げます。

なお、本稿は愛知県立大学学長特別研究費(若手研究)「日本近世における〈虚構〉としての「宮本武蔵もの」実録の展開」の助成を受けた成果の一部です。